

第 部 パネルディスカッション

大学院が求めるものと求められるもの

コーディネーター

赤澤 清孝（ユースビジョン代表）

パネリスト

前田 考一（経済学研究科）

一居 隆司（長浜市職員 2002 年卒 OB）

土山希美枝（法学部・准教授）

赤澤 前田さんから順次自己紹介していただきますが、その中に、なぜこの大学に入られたのか、感じられたことなどを織り込んでお話していただければと思います。

前田 僕は職業的には企画、プランニングをずっとやっています、たまたま NPO の放送局でラジオカフェがありまして、そこに携わっていたこともあり、ここにいるわけです。ラジオカフェで大学院のことを数年前に知って今年、大学院に来ることになりました。あまり優秀な学生ではないのですが、ここに期待したのは他業種、僕が多分知らない職業、公務員と括ってしまったり、NPO の職員だけではなく、いろんな分野の方がいると思っていましたので、他業種の方の考え方が自分の仕事に生かせるかなと思って来ました。この大学を選んだ理由は、ラジオカフェの関係で、ここの説明に来た時に、僕の故郷は 18 歳までいた滋

賀県の彦根なんです、滋賀県の関係者が多かったこともあります。今、滋賀県がどうなっているか気にかかっていたし、いずれ滋賀県に対して何か提案できるような情報源が入ればいいなと思う面もありました。

赤澤 どんなことを通して、そのようなことを得られたのか聞かせてください。

前田 「違い」というか、いろいろな議論を授業でされますが、考え方が違うというか、こだわる点が違う方が多くて、自分の目が行き届かなかったのか、その人が細かいことにこだわりすぎているのか、いろいろそういう差が勉強になりました。あとは情報の集め方とか、行政の方の情報源とか、こういうふうを集めてきて論を立てているのだなというのが、仕事上、参考になりました。

赤澤 こだわる点というのはどういうと

ころですか？

前田 一概には言えないですが、講演でも「飛べ」という話がありましたが、企画でも、僕たちもプランナーの仕事について、飛躍というのをどうやってするかということは、よくトレーニングさせられたんです。たとえば今日のこの会議の打ち合わせでも、小さなことにすごく丁寧に行っていたのですが、そこは自分が今、社会人を何年かやってきて忘れていたことだなと思いました。行政の方は、すごく気がつくんだなとびっくりしました。逆に本質に至る時間が足りないんじゃないかな。もっと最初に本質から話した方が問題解決は早いのかなというところもありました。

赤澤 今回のテーマの「地域公共人材」について、前田さん自身は、どうとらえておられますか？

前田 今も考え続けているんですが、滋賀県が気にかかっていたというのは、若干、それに当てはまるのかなというくらいで、明確に「地域公共人材」と定義できるほど研究できていないですね。ただ昔から滋賀県にいと「京滋」という言い方で、京都と滋賀を一緒にして考えるんですが、いずれそういう時代が来るかなというのがあって、道州制とか大げさに言っていますが、行政の方もそういう問題に直面していたり、合併などもあるかと思いますが、地域をもう少し大きな視野で、とらえられるような人を言うのかなと思っています。

赤澤 続いてこの大学院コースOBの一居さんからお願いします。

一居 長浜市の一居と申します。5年前、このコースが設立された1期生です。長浜市役所に勤務をしております、この2月からは合併推進室で市町村合併にかかわっ

ております。5年前、通学しておりました。当時は合併も本格的に進んでいませんでしたし、地方分権一括法が施行され、権限移譲であったり、国、県、市の役割や、公共の考え方など、いろいろ大きく変わりつつあるという状況だったと思います。僕自身も市役所に入って13年目で、それまでこれといった勉強もしていませんでしたので、「これは勉強しないといけない」と危機感を持って、このコースに参加させていただきました。

当時は、農政課にいて、滋賀県の琵琶湖の湖北地域でも一定の田んぼの面積、山林の面積を持っているわけですが、第1次産業が疲弊しているという状況の中で、湖北が合併によって一つになるという話がありまして、それをうまく組み合わせて考えられないかという問題意識を持ってこの大学にきました。指導教諭の平野先生が「一居君、お米ってお酒になるだろう。アルコールはエネルギーになるのと違うか？」ということをつまみヒントとしていただきまして、昨今、「バイオマス」という言葉が新聞紙上に出っていますが、その「バイオマス」をキーワードに湖北地方で活用が図れないか、一体的な取り組みができないかということを修士論文でまとめさせていただきました。農業をキーワードに日頃の仕事をやっていく延長線上で修士論文も書くことができました。資料についてもいろいろと勉強しやすい環境だったと思います。

改めて先生方の指導をいただく中で、それまで現場で考える中で困ったり、問題や課題に直面してどうしようという状況に適切にアドバイスをいただきながら勉強できたのは非常によかったと思っています。仕事に従事しながら自分の仕事を理論立てて

理解できていなかったことがあり、そういう部分が先生方のご指導によって理論化して自分の頭に入っていくという機会になったなと思います。本質的な課題というものが何かということを言い当てていただけてよかったと思います。

赤澤 一居さんが入学された頃は、第1期ですね。その時には絵はあるけれども、まだ実績はなかったので、いろいろな人が自分なりのイメージを持ってここへ入ってこられたのでしょうか。本当にいろんな人が集まったと思います。一居さん自身は勉強以外にここに期待していたことはありますか？

一居 行政の職員とNPOのフィールドをお持ちの方、学生の方が一緒に机を並べて勉強できるという部分ではかなり刺激を得られました。授業を受けている時は行政の職員だからという、控えめな授業態度になっていたかと思いますが、そこで十分吸収してまた自分の役所に持って帰ってフィードバックさせていただいたということがあったと思います。

赤澤 最後は土山先生をお願いしたいのですが、このようなコースをたちあげられて、地域社会、そして大学にどのような影響をおよぼしたのでしょうか。「共生き」と「共変」という言葉をいただいています、その意味とともに話していただだけませんか？

土山 龍谷大学の土山でございます。最初のご質問は、なぜこういう大学院をつくったのかということも含まれていますが、私は2001年に着任した時は、すでにコースができることが決まっておりましたので、実はそこは知りません。しかし実際にいろいろやっていく中でわかってきたこととか、

体験的に「なるほど、こういうことなんだ」ということが、いくつかありますので、キーワードを並べてみました。

「共生き」と「共に変わっていくこと」。共生と共変ともいえるんですが、一緒に変わって行くということだと思っていただければ結構です。共生きは龍谷大学のキーワードでもあります、個人的にもなかなかいいキーワードだと思っています。社会の構造がどんどん変化してきた。どういうふうに社会が変わってきたのかという話を聞きたい方は私の授業を受けていただくか、この間、出した高いほうの本を買っていただくか、図書館にリクエストしていただいたら結構ですが、それを見ていただければと思います。

龍さんのお話にもありましたように、公共の部分と「私」の部分がシームレスになってきています。たとえば趣味で読書サークルをやっていたところ、そのグループに目が見えにくくなっている人がいるから、その人のために朗読して録音してテープにとってあげて、ついでにひろく活用してもらおうと図書館におく、といった活動を始めると、趣味のサークルが突然、公共的な活動をする団体になるわけです。そんなふうに公と私の間はすごくシームレスになってきていると思います。社会の中に出てくるさまざまな課題に柔軟に対応していくこと。片方では「持続可能性」を確保する、他方で人の生きる喜びをきちんと確保するとか、そういうところに向かう社会や人のつながりの構造をつくっていけるように私たちは変わっていかないといけない。共生きのために私たちも共に変わっていかないといけないという「共変」になるのだらうと思います。

そのためにはいろんなアプローチがあると思いますが、ようやく考えがまとまってきたのが、おそらく「地域公共人材の育成」というキーワードだと思います。この言葉について知らないという人がいましたが、それはあたりまえで、じつは我々が勝手につくった言葉であります。一居さんは聞いたことがないですね。そのあと4年前までは「地域人材」と言っていたはずなんです。私が留学から帰ってきたら「地域公共人材」になっていました。どこで何が変わったのか。

地域公共人材は何かというと、簡単に言ってしまうと「セクターを超えて、パートナーシップを結んでいろいろやれる人」と考えています。セクター間の壁がすごく厚い。ましてや終身雇用になじんできた日本では、会社に入ってしまうと、ずっとそこで勤めることがあたりまえだった。他の組織を知らないのは、ある意味、あたりまえで、言葉が通じなくなったり、考え方がわからなかったりすることもある。しかしそれを超えて地域の政策を考えたり、フランクに議論したりする能力のある人が求められるのだろうと考えるようになってきた。それを「地域公共人材」という言葉で表現することにした。このコースの立ち上げの以前、勉強会の段階からそういう方向性を意図してきたと聞いています。この言葉がどれくらい有名になるかどうかはさておき、最近、有名になってきたかと思いますが、そういう人材が必要だということは私たちは間違っていなかったなと、それなりの方向性を持ってやってきた、それが評価されるようになってきたなというのが、この5年ということが言えると思います。

赤澤 地域公共人材という言葉は他のと

ころで使われたり、何か広がりを見せていますか？

土山 その前に使っていた「地域人材」という言い方は、私たちが言いだす前にも後にもいろいろ使われていました。「地域公共人材」という言い方は、最近、想像しやすい言葉ではあるので使われるようになってきているのではないかと思いつつ、誰がつくった言葉だとなると逆に邪魔だったりするので、こだわらず社会の中に紛れ込ませちゃえ、と思っているという感じでいいでしょうかね。

赤澤 地域公共人材というのは、龍谷大学のクレジットだからということではなく、その目指してる概念そのものがどんどん広がりを見せればいいのかなと思います。

また少し話を戻しますが、前田さんに聞きわすれましたが、前田さんが大学院で現在研究されているテーマ等について話していただけますか。また、なぜそのようなことを勉強したいとおもわれたのかについてもお願いします。

前田 あまり自慢して言えることではないんですけど、自分が弱いと思った分野の統計とか、お金のことをやろうと思いました。企画書を書いています。結構、その部分は大きなことを言うとうそが多かったり、企画書をつくるために集めたりする資料が多かったりして、それは反省点でもあって、いつか自分も納得できて、客観的にも納得できる数字の企画書を書きたいなと思っていて、そういう手法をこの機会を利用して学べたらいいなと思っていましたので、そういう先生を選びました。

赤澤 現在、いくつか助成金を審査していますが、自分がしたいことをやっているんだという企画書も多い。今やっているこ

とが何の問題解決につながっていくとか、その表現が弱いことが多い。社会を変えようと思うと長い目で見ていかないといけない。そういう意味では今、客観的なニーズや根拠が求められているのかなと思いますが、そういう意味でも、公共という言葉を通じて考えていきたいと思います。

次に違う観点から質問します。忙しい時間を割いて大学院に来ようということで、「期待していたが、ちょっとこれは違ったな」ということがありましたら。募集要項を読むと期待させるようなことがたくさん載っていますよね。学生になられた早い順で一居さんからお願いします。

一居 余裕がなかったな、というのが覚えていることです。地方自治のこと、地域社会のことを見つめ直す課題や、意見を先生方やゼミの仲間から聞くのですが、1年という時間の中で、もっと知識を詰め込める余裕があればよかったな、と卒業してから思っています。仕事を持ちながら、という言い訳もあるかもしれませんが。同期生に多文化共生センターの田村太郎さんと湖南市の古谷さんがおられて、在住外国人の課題を熱心に議論された授業を覚えています。長浜市は県内でもトップクラスで外国人が多い地域ですが、そういう地域が持つ課題を国に伝えようと、外国人集住都市会議という全国的な組織があることを教えていただきました。そこへの参加を市役所に持って帰って担当のセクションに伝えていたのですが、昨年、正式に参加するということがようやく決まりました。これは僕が大学から持って帰った中で一番よかったことではないかと思っています。逆に互惠的連携ということでは、大学から一方的な情報ばかりいただくばかりで、行政の方から、大

学に対して何かできているのかなと時々、考えています。

赤澤 コースを受講される前に準備されたこととか、入る前に「やっていたらよかったな」ということとかありましたか。

一居 多分、僕は1期生なので先生方も手さぐりの状況があったかもわかりません。現在は、事前に学習する機会を持たれている場合もあるかもしれませんが、僕自身、もう少し自分の研究する課題にすぐ入っていけるような準備ができていたらよかったなと思います。

赤澤 プログラムに対して、どんなふうに関わりましたか？

一居 1年間52週ですが、多分、こちらに来ていたのは30週くらいだと思います。僕の場合は長浜からです。土曜日は朝一番に富野先生と河村先生の授業、水曜日は白石先生の授業で長浜に着くのが23時頃でした。思い返すと充実していましたし、土曜日はお休みですが、水曜は午後から市役所を休み、図書館にこもってパソコンを持ち込み論文と闘っていた思い出があります。

赤澤 職場にいと、なかなか時間がとれないですね。続いて前田さんに、こんなことを期待していたということについて。

前田 文字通りですが、受講することで自分の仕事に、劇的にきつと効果があるかなと思っていたのですが、自分の努力も関係するし、自分の時間のマネジメントも関係するのですが、成果と結果は思ったほどなかったと反省しています。

赤澤 それは、どういうことでしょうか？

前田 具体的に仕事が順調に回るとか、学んだことで、「なんてこんなに使える情報を得たんだろう」ということは、なかなか

なかったかなと。ただ自分の時間の管理で言うと、入学前に「今年はこれくらいの忙しさになるかな」と思っていたことを超えてしまったんですよ。いろんな状況の中で。それで優先順位から本気度にかかわっては落としてしまったかなということがありますね。ちょっと反省点です。

赤澤 なかなか自分で自分の仕事の量、内容をコントロールできない立場だと、思ったより仕事が忙しくなったりすると大変ですね。

前田 論文がちゃんとできていないにしても、仕上げていく段階で、メールで指導をいただいて、久しぶりに感度が上がる、知らないことに対して教えてもらっているなという、そういうのはあったのですが、自分の仕事の忙しさまでは相談できなかったですね。逆にこれからだなと思っています。受けた後、これからどう生かせるかということで、あえて「成果」と書いたのは「結果」ではないので。ホントにこれから結果に結びつけるように筋道を立てたいと思います。

赤澤 プログラムについて、さらにこういう点を充実させたいということがありましたら、土山先生からお願いできますか。

土山 学生さんに一番してほしいのは、まず貪欲になってもらうことです。むしろ大学が用意しているフィールドから奪い取って帰ってほしい。もう一度大学院で日常と違うところにあることを楽しんでいただく。学生生活を楽しむとか学ぶことそのものとか、基本的に貪欲な人が多いです。それはとてもいいことだと思います。大学を使ってやろう、使えそうな教員がいたら自分の仕事の方でも使ってやれ、みたいな、それくらいの貪欲さがあってい

いと思います。卒業されてからも同じで、1年で「おつかれ様でした」ではなく、今後につないでいてほしい。その意味でも貪欲になってもらいたいと思います。

大学の側からすれば、まだまだ道半ばであります。一居さんの時と今は変わってきていますし、この後も変わっていきます。今日、お話を聞いていても変えていけないといけないところがあります。ただ大学の中で形にする時間と余裕が十分でないところもあります。外部に「龍谷大学はこういうことをやっているんだ」とマメにアウトプットしていく発信力とか、卒業後もOB、OGのつながりを支える仕組みとか、どういうカリキュラムにしたらいいかとか。カリキュラムは少しずつ変えていっていますが、変えていくことが、まだまだ大学にも求められています。

大学もサブセクターです。外部との連携については、イメージされているほど、経験的にやってきたわけではない。林田さんのご指摘の通りですが、このコース自体が、大学が変われるかどうかという課題があって、いろんな組織がそうであるように、大学も変わっていかなくちゃ、というふうに一生懸命、もがいているところがあって。

他方、「地域公共人材」というのは私どもがつくった名称ではありますが、今日のシンポジウムのタイトルになるくらいに受け入れられてきている。院生が考えてくださったテーマであって、「こういうテーマにしたなら」と私どもが申し上げていなかったのですが、おそらくネーミングとしては、いいものなんだなと。それをアウトプットにつなげていく部分の手当てが、まだまだ大学としてはできていない。発信力という意味ではもっといろんな人が来られるように、

1年修了可能な社会人推薦だけでなく、学部卒の院生さんも一般の社会人入学生も、鋭意、熱烈募集中です。まだまだもうちょっとかなと思っています。

赤澤 今の質問につながるのが、次の質問ですが、「大学に入る前まではあまり期待していなかったが、入ってみたらおもしろかったこと」とか、あるいは、「その当時は何も思わなかったが、今思えばよかったな、仕事をとおして、あらためて良かったな」というもの。たとえばコースには入ってないけれども、裏プログラムというか、実はこんなことが面白いとか...そういったものについて聞いていきたいのですが。

土山 「こういうコースができるんだよ」「あ、そうですか」「よろしく」と言われて、かわらせてもらったのが最初の経緯だったんですが、一番大きいと思うのはつながりですね。それから次に手がかりです。つながりは今あるものにつながっていくことで、いろんな形のコミュニケーションができました。人のコミュニケーションだけではなく、それがプロジェクトに変わっていったり、イベントになったり、イベントにならないんだけど、一緒に「こういうことをしたいよね」という議論になったり、そういうつながりがたくさん生まれてきた。そのことは「あ、なるほどな。大学自体が新しい取り組みで変わっていくというのはこういうことなんだな」と個人的にも感じさせてくれるような変革でした。同時に手がかり。それを広げてくと、そのつながりを深めていったり、つながりをネットワークにしていくと、多分、「次はこういうことができるんだろな」という手がかりも一杯ありました。ただ手がかりを形にすることが難しく、まだ十分にできていないとこ

ろは、事実としてあるんですが。「あ、こういう人たちと一緒にやったら、こんなことができるんじゃないか。こういう人たちと、こういうグループがつながって、こういうことができるんじゃないか」というのが手がかりになって、そのことが自分の研究にも、個人的な学びとしても、刺激的なコースになってくれたと思います。私もそれで学ばせてもらっているということですね。

赤澤 1つでも2つでも結構ですので、こんなことからこんな手がかりが見つかったというようなお話を聞かせてください。

土山 NPOで活動されているところに他の院生が個人的にお手伝いに入ったりとか、まだ形になっていないのですが、教員にもある団体と、その政策提案につなげるようなプロジェクト動かそうという企画がありまして、個人的なところから、もっと組織的なプロジェクトへのつながりまで、いろんなことが出てきていますね。

赤澤 組織的なプロジェクトのつながりとはどのようなものがありますか。

土山 大学側では、NPO・地方行政研究コースと「龍谷大学地域人材・公共政策開発システムオープンリサーチセンター（LORC）」が核になっていますね。長い名前ですが、ここもやはり、いろんなセクターの、いろんな面白い人をミックスして議論しながら進めていこうよという基本スタンスを持っています。いろんな人がと言っても、意思がある人、コミュニケーション能力がある人、意思があって熱意があって、気合があって、本気があって「これをやったら面白いよね」という人たち、その組織が集まってやれるところですね。

赤澤 プログラムを運営している人たちにもいろいろなつながりがあったというこ

とですが、実際、そのあたりを受講してきた人たち自身の方からうかがいたいと思います。先に一居さんをお願いできますか？

一居 僕自身、考えていかないといけないと思っていますが、「これからの役所の仕事を考えること」と書かせていただきました。5年前、滋賀県は50市町村、7つの市と43町がありました。合併後には、26市町になりました。13市と13町。北の方にまだ6つ町が残っていますが、そこと合併しようとして現在、1市6町の合併を進めるという仕事をさせていただいています。合併を推進するポジションにはいるのですが、考えると時間をかけながら地域それぞれをだんだんと淘汰しているのではないかという気もしています。皆さんはどのようにお考えかわかりませんが、財政シミュレーションをしてみますと地方自治体はどこも借金が多いですから、かなりシビアにならざるをえない状況下で、市役所や町役場の仕事は今までと同じようにいかないだろうと思っています。そういう中でアウトソーシングのような形で地域へ仕事を投げてしまうことを考えておられる自治体もあるようですが、それは難しいのではないかと、実際の現場を見ると感じるところです。これから公務に携わる人間としてはどれだけ地域のことを思って仕事ができるか、地域のことを好きになれるかが大切ではないかと思っています。

赤澤 今でも一居さんの仕事場では「大学院で勉強してこい」というような仕組みがあって、行かせていただけるのですか。

一居 5年前に僕が行かせていただいた後、滋賀大学、中には早稲田大学大学院まで通う職員も出てきて、総務課で休暇が一時的にとれるような仕組みをつくって

いただきました。

赤澤 一居さんがもどってきて、何か組織内部の研修だけでなく、外部のリソースも使ってみようという空気というのが伝わったのでしょうか。

一居 職員研修については職員の意識や、職員研修に対する上の方の思いが、結果を左右すると思います。僕らもOBとして頑張っているという意識はあります。

赤澤 一居さんは自身の中で変化があったのかと思いますが、周りの人は一居さんの姿をどのようにとらえていたのでしょうか？

一居 当時は熱い議論を闘わせた後、次の日に出勤して同じトーンで、職場で話をしていたような気がします。ちょっとうるさがられたかもしれませんが。今はそんなことはないですけど。後輩には自分で積極的に学習することを勧めるようにしています。

赤澤 一居さん以降も何人か長浜の方からこちらにいられていますか？

一居 残念ながら、ここ数年で合併とかがありましたので、かなり忙しい状況が続いていることもあっていません。

赤澤 そういう意味では1年間人を出すのは難しいということで、行った人がどのような成果をだすのかということがとても大事ですね。前田さんはこの3月まで学生ということで、一年間を振り返ってみて、大事だったと思うことなどを話していただければいいかな。

前田 論文を書いた後なので、土山先生の意見にかぶっていますが、適当なつながりというか、語弊があるかもしれませんが、いい距離でのつながりという意味と、しがらみが大事だと思います。僕も仕事をしていて痛感するのは、がっちりした人間関係

もすごく大事で、武器にもなるし、本来、人間が望んでいるものだと思いますが、いろんなところで必要とされるものは、ちょっと知っているとか、若干、一緒に何かしたことがあるとか、そういうことが多くて、大学にもずっと来られるわけではないので、週に何度か会ったりするメンバーを、僕は今、適当なつながりとしてとらえていて、これが逆に仕事とか、今後、もし研究とかの機会ですることがあっても、そういう関係が生きてくると体感しています。周りでも職業をもっている方は適当なつながりを持っている方が評価される時代なのかなと痛感していて、それを学校に来て、こういう場所に立って聞かれて、改めて言葉にすると、ああそうだなと、またどこかの企画書で使おうかなと思います。

赤澤 このコースはNPOの方や、公務員の方など、さまざまな職種の方で成り立っているのが特徴だと思いますが、受講生の中で普段、接点のない人たちと接することによって、どのようなことが生まれていたのか、どのようなことを感じていたのかについて聞かせていただけますか。

前田 司会の西川さんとか、行政のことをよく話してくれたりすることがあって、僕が「こう思います」と言うこともあって、僕自身もなんかうれしいし、いつか役に立てばいいかなと思ってしゃべっています。何でもないことなど、先ほど赤澤さんからツッコミで「忙しいことを相談しましたか？」というようなことがでしたが、学校の間だと気楽に相談できたりするんじゃないかと思いますので、そういうことが何回かあったかなと思います。その後の成果は聞けてないかもしれませんが、その時に「どう思いますか？」と聞かれて自分なりに

答えることで、自分もトレーニングになるし、それが役に立てばうれしいし、今後、「こういうことで前田さんに聞いてみよう」ということもあったら、それはそれでうれしいなと思います。僕もそうしたいと思っています。

一居 ここに通わせていただく前は大学の先生方は、行政で言うところと計画を作成する時に参考意見を述べていただく学識経験者として委員会にお入りいただき意見をいただく方だなという認識だったのですが、実際、近くでお会いすると、このコースの先生方は自らのフィールドをお持ちで、いろんな研究をされている実績をお持ちの方ばかりですので、そういう部分では刺激を受けました。尊敬できる方が一杯できたと思っています。

NPOの方々もそれぞれフィールドで活躍されている方ばかりでしたので、行政の職員としてはいろんな現場に携わっていますが、市民からの目線ということでは、よりNPOで活躍されている方の方が近いですから、そういう部分ではナマの声をお聞かせいただいたなと思います。

赤澤 一居さん自身、このコースを始める前と始めた後で、NPO観など、何か変化したものがありますか。

一居 すばらしい方がおられるだろうなと思っていましたが、実際その通りでしたし、今もおつきあいさせていただいています。いつも刺激をいただいております。

赤澤 逆に前田さんは公務員の方々とディスカッション等をとおして接することでイメージがどのように変わりましたか。

前田 いい人ばかりだと思いますね、いい人というのが、行政にとって、いいかどうかは別だと思うんですよ。そういう人た

ちが将来、要職について変えていただければいいのではないかと個人的には思っています。

赤澤 今、目線の違う二人から聞かせていただきましたが、実は教員自身も混じってやっていたわけですが、土山先生はそういったあたりをどのようにお考えですか。

土山 セクターの壁を乗り越えることの必要性は語らってまいりましたが、大学ではその前に学部や学内組織の壁を乗り越えることが、どんなに大変かということは語っても語りつくせないものがあったり、なかったりするんですけど（笑）。しかしそれ自身も、やる価値のあることだなと思っています。このコースにかかわってくださっている先生方は、そういうお気持ちがあるからかかわってくださっているわけで、その意味で変わっていくために一緒に頑張る必要と楽しみたいなところがありますね。

赤澤 このプログラムの母体にはそれぞれ経済学部、法学部とありますが、学部そのものに対して何かインパクトを与えようという意図はありますか。あるいは、興味のある人たちだけでやっていこうというものでしょうか。

土山 そうですね。一緒にやっていると「こうやったら、こういうこともやれるよね」とアグレッシブな方でのエンジンはかかりますよね。学部だけではなくて、大学そのものにインパクトを与えたいということがあります。大学院教育のあり方とか。そこにどんな価値を持たせるのかということとか。コストペイということと言うと大学院は基本的にはペイしないんですね。なぜそこに取り組むのか。価値があるということ自体大事ですが、物事が変わるの、それが、必要があるか、そこに喜びがあるかど

ちらか。できれば両方があるといいですね。かかわっていることに喜びもあり、かかわっていることによっていろんなものを変えていくことが必要だと信じています。その意味ではここにかかわっている教員にとってもコースをやっていくことはある意味ミッションです。いい話ばかりみたいですが、いろんな課題は一杯あります。

今日の話の中で、つながりとか話題に出てきていますが、私たちが考えていた教育、ここでやろうとした大学院教育は何を得られる部分なのかというのは、まだまだ課題があると思っています。大学院は教育をするところなのか、研究をするところなのかという議論も大学自身、持っているところですが、言葉の議論に入ると長くなるので「学び」という言葉で言ってしまいます。どういうカリキュラムで何を学べるか。総合力とかコミュニケーション力とか、同時に政策提言能力、それももちろん必要だと。どういう能力をどうやってつけることができるか。それはどこでやるのか。大学院でやることか、学部でやることか、そうではないとこでやるのか。大学院でできるのが、どの部分かについては、まだ手探りの部分が多いなと思っています。ただこの間、やってきて基本的な方向性は間違っていなかった。その方向性をより具体的なものにしていくために、見えてきた手がかりやつながりを、どういうふうに形にしていくのか。その模索をしながら、それが、うちの教育や研究の場の提供や、あるいは社会人にとっては研修になると言えるのかなと思っていますが、そのキーワードが「地域公共人材」なのかなと。我田引水ですね。

赤澤 こういう人が集まっている場そのものに意味があるのかなと思いますが、受

講生がいろいろな年代の人たちがあつまっているゼミそのものの意味などはどうでしょうか。

前田 先程、公務員のイメージをいい人だと言ったんですけど、優秀な人と言い換えておきます。仕事をやりきる能力がある人が多いなという感じがしました。そこだけ訂正しておきます。社会人になると異業種交流会が多くて、僕が異業種の方の考え方を知りたいと思ったら、そういうところへ行けばいいんですが、その場合はビジネストークというか、結果を出したいという人もいる、PRに来られる方もいる、意外にホンは聞けないなというのが経験としてある。ゼミとか、この場もそうですが、僕もそうだし、行政の方にも、そうお願いしたいと思うのは、意外にホンが聞けたなと思います。率直に行政のことも言える場であってほしいなと思いますね。

赤澤 一居さんにとってはどんな場でしたか。

一居 行政の職員は、本気で体裁に関係なく意見が言えていたかなという部分は、振り返ってみると、どうだったかなと思いますね。そのへんはバランスなのか、遠慮なのか。学部生と話をすることができて新しい視線も感じることもできたのはよかったと思います。

赤澤 会場の皆さんからも意見を聞きたいと思います。

室 研修という言葉は自ら研ぎ澄ますという積極的、主体的なものですから、研修というものがいやいやしていることのないように気をつけていただきたい。

赤澤 そのあたり、一居さんなどは研修のとらえかたはどうですか。

一居 これから行政の厳しい状況の中で、

職員自身も地域でいろんな活動と一緒にしていく中で、自ら進んで勉強していかないと、とてもついていけないという状況が出てくると思います。自ら進んで勉強する、学ぶという姿勢は、誰かに言われることでなく、内発的に働くようなことが必然的に生まれてくるのではないかと思います。

塩川 法学部3回生の塩川です。白石先生の下で勉強させていただいています。今日は社会人の方々の話だったのですが、社会人の立場から、学部生と交流してどのようなことを期待されるのか、また土山先生の方からは学部生にどのようなことを期待されるのかお聞きしたいです。

赤澤 ちなみにその後はどのように進みたいのか希望があればお聞かせください。

塩川 地元が神戸ですので、神戸に貢献するよう公務員になりたいです。

前田 学部生とこの1年でおつきあいがあったかについては、ラジオカフェで多く学生とは会っていますが、ここではたまたま中国の留学生の方が多くて、ここでの交流も刺激というか、これからの何かに使えると思っています。中国の方の考え方とか勉強とか、勉強という言葉も中国語では嫌々するものと聞いたりとか、違う人と会った時は面白いなと思いました。今、学部生には「自分たちと全然違うふうにやってほしいな」と思います。気にしなくて自分のやりたいことをやられたらいいなと思います。接していないので今の学部生については答えきれないんですが、同級生で大学の職員をしている人に聞くと「以前に比べると年々幼くなってきているような気がする」と。理由はわからないですが、それはどうなのかなと、個人的には興味は持っています。

赤澤 一居さんの方はどうでしょうか。

一居 僕は学生のアイデアはすごく面白いと思うこともあるので、決してアイデアを収斂させてしまうのではなく、広げて社会人の学生、行政の職員、NPOの職員に提案されるといいのではないかと思います。頑張ってください。

土山 学部生の方に何よりも望むことは、もっとたくさんの方が、このコースに来てくれることですかね(笑)。半分冗談なんですけど、実際母数として学部卒の院生に入ってもらいたい。そのためには私たちも発信力をつけていけないといけないと思います。

それから入ってきた時に若い学生に望むのは「もっと考えていることをしゃべってほしい」とNPOの院生とか行政の院生もそういう感想を持つことが多いようです。自分たちはしゃべって刺激を受けたが、もっとどんどん学部卒の院生の方たちにガツガツしゃべってほしい、と。どこかで遠慮しちゃうんですね。フィールドを持っている人たちに「自分は何も知らないんじゃないか」という怖さがどこかにあって聞き役に回る。でも、「それはこうじゃないんじゃないですか?」と、フィールドがないから言えることもある。知らないということは恥ずかしいことではなく、恥ずかしくてもガツガツ話に加わる、そういう態度で自分の中に問題意識を持って、相手の話を聞いて問題を見つけて、そこに自分なりの言葉で踏み込んでいく。頭の中でモヤモヤ浮かんでいるものを言葉に変換するのは決して簡単なことではない。その訓練のためにはそういう自由な議論ができる場が重要なんです。そこを貪欲に生かしてほしいと思います。特に大学院での授業で、こんなふうに知的なコミュニティができるのは、実はあ

たりまえではないんです。必修の科目があって、そこに参加してくれる人が、そこでは物足りなくて2階でしゃべったり、のみながら語ったり、シンポを開催したり、合宿したりしてできていくコミュニティなんです。それができている大学院は少ない。そのことを生かして大学を使ってガツガツしゃべってほしいなと若い学生さんには思っています。

赤澤 一居さんお願いします。

一居 こういう形で自主シンポジウムということで今年、卒業される方が自主的に運営されているということは5年前にはとても考えつかなかった。そんな余裕はとてもなかったと思います。本当にすごいなと思います。今日も同窓会の名簿をつくるという話もありましたが、ネットワークを大切にしていきたいと思います。

赤澤 つづいては土山先生お願いします。

土山 学部生で入って自治体に就職したOBの人が来ているので、最後につかまえて話を聞いてもらってください。現役の学部から入った大学院の方にも。院生さんには貪欲に学んでほしい、それをつないでいてほしい、人的なつながりだけではなく、職場でつないでもらう、実際に大学がやっていたことを縁にして職場で勉強会をされた人もいるし、今年インターンシップで入った学生さんが、インターンシップの学生を囲んで勉強会をしていただいた団体もあります。横のつながり、学内を契機として、他業種、他地域とのつながり、職場にもつながる。そういう縦と横のつながりをつくってってもらいたいなと思います。そのために私たちができることは何か。そこから手がかりをどうやって形にしていくか。カリキュラムをどう改革していくか、それ

らが変わっていても大学が何をやっているか、わからないといけない。大学自体も自分たちの中だけの評価では変わらない。外からの評価にどうつなげていくかということとは大きな課題として残っています。あとはそれをやれるだけの時間ですね。我々が時間をどう確保できるか。家庭を持っておられる先生方はどうやって家庭の平和を守っておられるのかわからないくらい、このコースにエネルギーをかけておられるので。大学の限られたリソースを活用していくことになる仕組みづくりが、大学の今後の課題だと思いますね。

赤澤 では最後に前田さんからひとことお願いします

前田 そうですね、優秀な学生でもないのですが、現実的なことを言うと土日にもっと授業が多いとうれしかったかなというところですかね。プラス超個人的に子どもが小学校に入学する年にあたってしまって子育て負担が僕にかかってきていまして、育児施設があったらと思います。我が儘という方が進歩するという前提に沿って言うと、そういうことですかね。

赤澤 わずかな時間なので、あまり深めることはできませんでしたが、このコース出身ではない私が、外から見ておもしろいと思うのは、その空間そのものが大事なのだろうなということです。今回、司会させていただくにあたり、事前に通信などをいただき、読ませていただきました。コースの話で河村先生が知識と技術と姿勢が大事だとおっしゃっていましたが、知識や技術は本を読んだりして得ることができますが、態度や姿勢というのは、いろいろな先生方や優秀な学生の方々、そういう人たちが集まって刺激をうけて、そういう中で育まれ

るのかなと思っています。質問でもいただいたように、既存の教育や研修に対して、実際にあらたな価値を発信していただけたらおもしろいと思っています。今日はどうも有難うございました。つづいて、総括の意味で白石先生の方からお願いします。

白石 皆さん、どうもありがとうございました。とても楽しい意義のある企画になりました。私は法学研究科でこの授業を担当していますが、このコースを立ち上げることをやってきたうちの一人ですので、この5年間の経緯を一座の顔を見ながら、ずいぶん変わってきたなと思います。教員の側、大学の側が「地域公共人材」という言葉にありますように、どういう人たちを大学、大学院から送り出すか。地域の中で、大学がどういう役割を果たしたらいいかについて、企画を最初に立ち上げた時、そういう発想法自身、馴染みがなかった。大学は地域の中で水に浮かぶ孤島のような存在だった。だけど孤島にはリッチな資源があるから小舟で寄せてくる難民がいたら何かしてやろうかというくらいの、高ぶったような、上から見るような感じで大学は地域の中において、地域とかかわりを持つことについては、ほとんど意識していなかった。それが7、8年の間にずんぶん変わってきたということだと思います。

文部科学省も大学、大学院と地域との連携、地域の課題に対する新しいアプローチとかに助成金を出すという方向に、この数年、大きく舵を切りました。端的な現れは学生の進路ですね。以前、大学院に来るのは研究者を目指すということでしたが、明確に地域の中で役に立つ存在になりたい、職業的にもNPOの職員や自治体職員になる。学部卒の学生とは違う志や気持ちの持

ち方、知恵の持ち方で、そういう職につきたいという人たちが増えてきた。以前の大学院では考えられなかったことです。

地域公共人材という概念もそうですが、大学院のあり方も、いい方向に今変わりつつあるというか、100%いい方向かどうかわかりませんが、何か動きを感じる、いい意味でのダイナミズムを感じさせる状況になってきています。その中で今日、ここで皆さんがこのシンポジウムを企画・運営された。大学の教員も「第一線の現場でやっているぞ」という感じを最近持てるようになりました。今までは大学の教員は一人の社会活動をする人としては第一線に立っているかもしれないけど、大学の中にいると違うことをやっているような気がしていたんですが、ここ数年、やっと大学の中にいて社会の一線に立つことをやっているという感じを持てるようになりました。

今日のような企画も私たち大学側にとっては大事ななと思っています。当事者が発信することが一番重要なんだと。学生が声を上げたり、大学院で学ばれた人たちが声を出していく形で、大学としての発信力やイメージを高めていったり、課題を突きつけられたりすることが、一番重要だと思います。教育というものが、勉強を強いているような形でやる中では、そういう声は出てこなかったと思います。社会も変わります。NPOも自治体も新しいタイプの職員が

必要だという時に、当事者としてそれにフィードバックする声を上げてもらわないと、権力者たちが勝手にカリキュラムをつくりますからね。そういう状態を今、我々は危惧しながら、しかしこういう試みをやれる現場に、今、いられると思っています。ぜひ皆さん方には、フィードバック型の大学院生としてあってほしいと、これからも願います。皆さん方の試みに対して、我々も、そういう点で敬意を表したいと思います。

今日、キーノートスピーカーとして3人の方にご発言いただきました。なるほどな、と感銘を受けたのは、人の話にきちんと耳を傾けるということ、それぞれのセクターや経験によって言葉というのが違う意味を持っている。そういうことをきちんと理解する知識と力という基本的な部分と、やる気、勇気、自分の心の持ち方の両方がないと、きちんとした人間としての力がない、地域公共人材にはなれないどころか、まともな人材にもなれないということが、よく伝わってきました。つつい高尙な言葉で踊らせたがるのが大学の教員の習性ですが、地道な人材能力についても注意してカリキュラムをやっていきなさいよと、教えていただくことができて勉強になりました。3人のスピーカーの方に心よりお礼を申し上げたいと思います。以上で私のまとめに代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

[2008年3月8日講演]